

秋 田 大 学
 教養基礎教育研究年報
 45 - 54 (2019)

1984年の記憶 —— 炭鉱ストライキと現代英国表象文化 ——

大 西 洋 一

Remembering 1984: Cultural Representations of the Miners' Strike in Contemporary Britain

Yoichi ONISHI

<Abstract> This essay is a survey of cultural representations of the 1984-85 British Miners' Strike at the time of the 30th anniversary in 2014. This historical event provides useful documentary and fictional material for various kinds of representations and performances, ranging from a dramatic analysis of the industrial dispute to a dance theatre about mining labour. The twenty-first century representations of the Miners' Strike not only continue to prove its historical importance in contemporary British culture and politics but also offer new ways of fostering a sense of "solidarity" among people.

1 はじめに・・・1984-85年「炭鉱ストライキ」¹とその文化表象

1984年3月6日、イギリス石炭庁（The National Coal Board (NCB)）総裁イアン・マグレガー（Ian MacGregor, 1912-1998）は、全国に174あった炭鉱のうち採算性が低い20を閉鎖する計画を発表する。時の首相マーガレット・サッチャー（Margaret Thatcher, 1925-2013）は、2万人の失職につながるこの炭鉱閉鎖計画が炭鉱労働者の大規模な反抗を受けることを予測していた。そのため、「80年雇用法」「82年雇用法」「84年労働組合法」などの法的整備により労働組合の争議の力をあらかじめ削いただけでなく、ストライキの間をしのぐ石炭の備蓄や発電所が重油を燃焼できるよう改造するなどの代替エネルギー源を確保し、そして英国

製鉄公社（British Steel Corporation）会長として企業合理化に辣腕を振ったマグレガーを前年に石炭庁総裁に抜擢した上で、満を持して戦いに臨んだのだ（山崎 130-132）。

この「宣戦布告」に対し、3月12日、全国炭鉱労働組合（The National Union of Mineworkers (NUM)）委員長のアーサー・スカーギル（Arthur Scargill, 1938- ）は、労働組合法で規定された全国投票抜きで可能な地域からストライキに突入するよう指令を出し、全炭鉱労働者の約70～80パーセントが争議行為に加わった。しかしながら、法整備によるストライキ対策が十全に行なわれていたため（たとえば「遊撃ピケ隊（flying picket）」の派遣禁止など）、この争議行為の随所に「違法性」が見いだされたことにより、ストライキは警官による激しい弾圧を受けた²。また、サッチャー首

1 このストライキを包括的に扱った日本での代表的な研究に、山崎勇治『石炭で栄え滅んだ大英帝国 産業革命からサッチャー改革まで』（ミネルヴァ書房、2008）、早川征一郎『イギリスの炭鉱争議（1984～85年）』法政大学大原社会問題研究所叢書（御茶の水書房、2010）がある。以下のストライキに関する叙述は、山崎の第10章、早川の第2部、長谷川の第5章、Jonesの第2章を参照した。

2 代表的な「戦闘」に、6月18日にロザラム（Rotherham）近郊のオーグリーブ（Orgreave）にあるコークス工場で勃発した「オーグリーブの闘い（Battle of Orgreave）」がある。ストライキに参加していた数千人の炭鉱労働者と警官隊との衝突であり、この闘いのさなかに騎馬警官が無抵抗の女性カメラマンに警棒で殴り掛かる様子を写した写真は、炭鉱ストライキ全体を象徴するイメージとなった（Oldham 142-147）。

相は、ストライキに参加している炭鉱労働者を「内なる敵 (the enemy within)」と呼び、彼らに屈することは議会制民主主義を暴徒の支配に明け渡すことだと述べて徹底抗戦を訴えたため、この両者一歩も譲らぬ争いは国を二分するものとなって続いた。

炭鉱労働者たちは、争議の違法性を問われて締め付けを受けた労働組合の財政が逼迫し支援が滞る中で、ストライキ中の窮乏を耐え忍ばねばならなかった。彼らは地域のコミュニティから、とりわけ妻であり母である女性たちから献身的な支援を受けていたが³、政権側の様々な「切り崩し」策⁴により年末にかけて徐々に分断され、職場復帰する者が増えた。最終的に1985年3月3日、NUM 特別代表委員会が開かれてストライキ中止が決定され、約一年間に及ぶ戦いは炭鉱労働者側の敗北という形で幕を閉じることとなった。

「戦後史の分水嶺」(長谷川 137)とも呼ばれる1984-85年「炭鉱ストライキ」は、労使関係を後戻りができぬほどに変貌させ、ネオリベリズムの価値観の社会への侵攻を加速させたことにより、サッチャー時代とその後の英国の行く末を決定づけた重大な政治的・社会的事件であった。それはまた広範な影響を「文化」の領域にまで及ぼし、いわばストライキを問題化することによる「創造的な異議申し立て (creative dissent)」(Oldham 18)と言える文化表象を各分野に出現させることになった⁵。本稿で主として扱う上演芸術の分野に限っても、ストライキ中のケント州の炭鉱労働者を描き、事態の進行とともにその形を変えて最終的にはNational TheatreのCottesloeの舞台にかかった7:84 Theatre Company Englandによ

る『イングランドの園 (The Garden of England)』(1984)、ストライキ中の炭鉱労働者家族へのインタビューなどをもとにして作られたドキュメンタリー演劇であるロン・ローズ (Ron Rose) 作『内なる敵 (The Enemies Within)』(1985)、一人芝居の形式で様々な人物を演じ分けて、ストライキ中の女性の姿を浮き彫りにしたコーデリア・ディットン (Cordelia Dutton) / マギー・フォード (Maggie Ford) 作『回れ右 (About Face)』(1985)などの劇作品が生まれた (Milling 73-77; Peacock 137-138, 152-154; Saunders 9-10)。それに加え、炭鉱ストライキによって生まれた様々な「文化実践」の価値を再確認するべくカタログ的に収集し評価した Craig Oldham, ed., *In Loving Memory of Work: A Visual Record of the UK Miners' Strike 1984-85* (2015)、大衆の側からの「抗議」の文化や「ストライキ」表象を考察する *Digging the Seam: Popular Cultures of the 1984/5 Miners' Strike* (2012) や Katy Shaw, *Mining the Meaning: Cultural Representations of the 1984-5 UK Miners' Strike* (2012) や Granville Williams, *Shafted: The Media, the Miners' Strike & the Aftermath* (2009) など、労働者階級とストライキの「文化」を学術的に考察する試みが現在積極的に行なわれている。

このような同時代における炭鉱ストライキの文化表象とその考察については稿をあらためて取り組みたいと思っており、本論文では「炭鉱ストライキ」から30周年となる2014年においてさえこの労使間紛争が広範に及ぼした影響をテーマとした作品がなおも立て続けに生まれている状況を鑑み、対象をこの時期に生まれた演劇/映画/ダン

3 「炭鉱ストライキ」における女性の役割の重要性はつとに知られているところであり、とりわけストライキ時の女性たちの活動とその後の彼女らの人生を語って興味深いものに Holden がある。

4 クリスマスが間近に迫るにもかかわらず、長引くストライキで組合の資金難は一層厳しくなり、暖房用の石炭でさえなかなか手に入らないような窮乏を耐え忍んでいる中、職場復帰者には特別ボーナスを支給するとNCBは発表した。この「クリスマス・ボーナス攻勢」については、早川の第5章を参照。

5 文学の分野から一例を挙げれば、重要な詩作品として、トマス・グレイ (Thomas Gray, 1716-1771) の「田舎の教会墓地で詠んだ哀歌 ("Elegy Written in a Country Churchyard")」(1751)に倣い、リーズの落書きだらけの墓石がある墓地で様々な「対立」に思いを馳せたトニー・ハリソン (Tony Harrison, 1937-) の『対立 (V.)』(1985)がある(後にTV局Channel 4が映像化)。また、ストライキ当事者やその家族による「民衆的 (popular)」な文化実践としての「詩作」を取り上げて興味深いものに、ITVの番組「サウス・バンク・ショー (South Bank Show)」の依頼で制作されたが、その政治的偏向性のために放送されなかったケン・ローチ監督 (Ken Loach, 1936-) のドキュメンタリー番組『お前はどちらの側につく? (Which Side Are You On?)』(1984)や「炭鉱の子どもたちが書いたストライキの本」である Martin Hoyles and Susan Hemmings, eds, *More Valuable Than Gold: A Collection of Writings on the Miners' Strike of 1984-1985 by Striking Miners' Children* (1985)がある。

スの分野に限定して検討してみたい。具体的には、演劇作品からジョン・ゴドバー (John Godber, 1956-) 作『やられた! (Shafted!⁶)』(2015) とベス・スティール (Beth Steel, 1975-) 作『不思議の国 (Wonderland)』(2014)。映画は『なおも内なる敵 (Still the Enemy Within)』(2014) と『パレードへようこそ! (Pride)』(2014)。そしてダンスについては、ガリー・クラーク・カンパニー (Gary Clarke Company) による『石炭 (Coal)』(2014) である。1984年から30年という時間が経ってもなお盛んに「炭鉱ストライキ」を再び問い直す試みが各方面で行われており、それが現代においてはどのような意味合いを持った文化実践になっているかを記録して考察してみたい。

2 <演劇>炭鉱労働者が失った誇りと絆・・・ ジョン・ゴドバー (John Godber) 『やられた! (Shafted!)』(2015) / ベス・スティール (Beth Steel) 『不思議の国 (Wonderland)』(2014)

前節で見た通りに、争議発生当時から演劇が炭鉱ストライキを取り上げることは多かったわけだが、ストライキ30周年を迎えるにあたってあえて再びストライキとその余波に関わるテーマを取り上げた芝居⁷を二本ここでは検討してみたい。

ジョン・ゴドバー作『やられた!』⁸は、炭鉱ストライキ後のある元炭鉱労働者夫婦の人生の変遷をたどった作品であり、彼自身が主宰するジョン・ゴドバー・カンパニーが制作にあたり、実生活でも夫婦であるジョン・ゴドバーとジェイン・ソントン (Jane Thornton)⁹が主演を演じた二人芝居である。自身が炭鉱労働者の息子であり、労働者階級的生活様式を熟知しているゴドバーは、失われてしまった古き良き時代の炭鉱町での人々

の暮らしをノスタルジックに描いた戯曲 (『ハッピー・ジャック (Happy Jack)』(1982), 『九月の雨 (September in the Rain)』(1983), 『地の塩 (Salt of the Earth)』(1988) など) を上演して、地方の観客から絶大な人気を得てきた (Godber, *Plays 2*)。しかし、この芝居の第一幕で描かれるのは、ストライキ後に炭鉱を離れざるを得なくなってから自信を失い無気力に陥った夫ハリー (Harry) と、彼を支えようと奮闘する妻ドット (Dot) の姿である。炭鉱労働者の誇りを捨て切れず新しいゴミ収集や窓掃除の仕事も投げ出してマリファナに逃げる夫と、仕事を掛け持ちしてでも暮らしを立て直そうとする妻。1984年のアプトン (Upton)¹⁰での場面から年を追って二人の生活の様子が切り取られていくのだが、ドットは現在のこの停滞した生活を打開したいと思い、海辺の保養地であるブリドリントン (Bridlington) に引っ越してそこでB&Bを持ちたいという夢を抱く一方、ハリーの方は自分のルーツはこの村だからといって前に進むのを拒むのである。

そして休憩後の第二幕の幕開きは2014年現在、年老いて車椅子にすわる妻ドットとそのそばに立つハリーの姿から始まり、今度は時をさかのぼりながら進んでいく。東の間の年月ではあるがブリドリントンでのB&B経営がうまく行く二人だが、寄る年波の中で心臓病やガンなどの健康上の問題や子どもたちが引き起こすもめ事に悩む姿が描かれており、最後は90年代に、アプトンを去ってブリドリントンでの希望と期待に満ちた新たな出発を二人が決意するところで幕を閉じることになる。すでに来たるべき未来を知っている観客にとっては痛切にドラマティック・アイロニーが感じられる終幕である。

確かに炭鉱ストライキに関しては様々な作品が

6 動詞の“shaft”には、“to cheat or trick someone, or to treat someone unfairly”という意味があるが、ここでは炭鉱の「シャフト、立坑 (a long vertical or sloping passage through a building or through the ground)」という意味がかかっている。

7 この他に、上演や脚本を見ることができなかったために取り上げられなかった作品としてCrucible劇場で上演されたBryony Lavery, *Queen Coal* (2014) や、Red Theatre Company と Unite the Union の共同制作によるBoff Whalley, *We're Not Going Back* (2014) がある。

8 2016年4月7日にRegent's University LondonのMarylebone Theatreで観劇。本作の脚本はまだ公刊されていない。

9 Jane Thorntonは彼女自身が劇作家であり、そして俳優でもある。彼女の代表作にはゴドバーとの共作である『シェイカーズ (Shakers)』(1985)があり、炭鉱ストライキに関しても、バーンズリー (Barnsley) での「炭鉱閉鎖に反対する女性連盟 (Women Against Pit Closures)」の支援活動を取り上げた『トウモロコシ畑の中で (Amid the Standing Corn)』(1985)という戯曲がある (Saunders 9)。

10 ウェスト・ヨークシャーにあるアプトンは、ジョン・ゴドバー自身の出身地である。

これまで書かれてきたが、それに関わる人々や地域にストライキがこれまで及ぼしてきた「永続的な影響」について書いたのは自分だけだとゴドバーが述べているように、この劇は炭鉱ストライキの「社会的後遺症 (the social fall out)」、すなわち「結婚の破綻、麻薬常用、アルコール中毒、ホームレス、自尊心の欠如、誇りの喪失」を一組の夫婦の關係に託して描いた芝居と言える (Godber “Educational Notes”)。熟年夫婦の長年続く結婚生活における機微をユーモアにあふれた対話で描いているため、この作品は大衆娯楽としての芝居としても十分成立している。しかし「個人的」なものにこそ「政治的」なものの影響が色濃く表れることを踏まえた上でゴドバーが強調したのは、一つの産業に大いに依存していたコミュニティがその根幹を奪い去られた時に生じる社会的混乱を個人の状況に映し出すことによって見えてくる悲哀である。この芝居は、炭鉱労働者の人生を振り返って描いたという意味においては、前出の『ハッピー・ジャック』と同様の構造である。しかし、ゴドバーの祖父の世代を描いて過去への郷愁を生む「甘くてほろ苦い (bittersweet)』『ハッピー・ジャック』とは異なり、サッチャー時代を経て炭鉱を離れることになった「元」炭鉱労働者たちの後半生を濃密に描写した『やられた!』では、仕事のみならず自信や自尊心まで喪失した夫とそれを懸命に支えようとして心と体をすり減らす妻の姿が心に突き刺さり、甘さよりも苦さがいや増す芝居となった。

その一方、ベス・スティール作『不思議の国』(2014)は、確かに炭鉱とそこで働く人々にスポットライトを当てた人間ドラマであるが、それと同様に「炭鉱ストライキ」の背後に存在していた政治家、実業家、ジャーナリストによる狡猾な策謀にもこだわった政治的演劇でもある。ノッティンガムシャーの炭鉱労働者の娘であるスティールは、彼女自身が脚本の序文で述べているように、「炭鉱ストライキの最良の記録」であるシェーマス・ミルンの『内なる敵 炭鉱労働者に対する秘密の戦い』(Seumas Milne, *The Enemy Within: The Secret War Against the Miners* (1994))などを手

がかりに、「事実に基づいたフィクション」としてこのヒット作¹¹を書いているのだ (vii)。

この劇は三幕構成で、第一幕は1983年のストライキ直前の英国から始まり、第二幕は1984年のストライキ闘争とそのクライマックスとしての「オーグリーブの闘い」、そして第三幕はストライキの終焉とその後の職場復帰の様子を描いている。この作品の優れたところとしては、舞台装置を効果的に使用しながら炭鉱労働の世界と政治の世界を併置して呈示した点が挙げられる。舞台下部では、まだ十六歳のマルコムとジミーの二人の新米が、地下世界の炭鉱労働に加わっていく様子を他のベテラン労働者とともに描いていくのだが、場面が切り替わると舞台上部では、経済学者ミルトン・フリードマン (Milton Friedman) の登場から始まり、石炭庁総裁イアン・マグレガーやエネルギー大臣ピーター・ウォーカー (Peter Walker) らが炭鉱閉鎖に向けて暗躍するのである。とりわけ政治的側面で重要かつ印象的なのは、デイヴィッド・ハート (David Hart, 1944-2011) の存在である。彼は公式には『タイムズ』紙の記者であり、なおかつサッチャー首相やマグレガーの顧問として働き、炭鉱ストライキの間はストライキ参加者の切り崩しを企てた点がこの作品では十分に強調して描かれているのだ (64ff)。

このような政治的な計略を背景として炭鉱ストライキが展開していくのだが、この物語を貫くプロットとして重要なのは、炭鉱労働者間の人間關係が変化を余儀なくされる過程である。第一幕では、新米のマルコムとジミーが、ケージが突然動かなくなったり、落盤が日常的に起こる過酷で危険な地下の労働環境を目の当たりにする。だからこそ労働者間の信頼關係が大事となってくるため、古参のカーネルは「地下じゃ、お前の命は常に他のやつの中にあるんだ。決して忘れるな」(21)と釘を刺す。マルコムとジミー、そして年長の労働者ファニーとスパッドは親友であり労働の仲間であるのだが、第二幕においてこの二組の友情の間にストライキが亀裂を生むことになるのだ。

第一幕の最後で、マグレガーが発表した炭鉱閉

11 ロンドンの Hampsted Theatre で2014年に初演を迎えたこの作品は、好評により二度再演され、2019年には作者の地元 の Nottingham Playhouse でも上演されている。

鎖計画に対しカーギルは全国ストライキを呼びかけるが、これが全国投票抜きで行われたために生じた動揺はこの芝居でも描かれている。「全国投票なしで全国ストライキなんかありえねえ」(58)とスパッドは語り、新米たちも「ジミー：いいか、おれたちもうストライキに入ってるんだ。／マルコム：いや違う」(59)と混乱を来している。その後の第二幕では、激しいピケ隊と警官隊の衝突などが演じられ、ストライキ闘争の渦の中に炭鉱労働者たちは巻き込まれていくのだが、そこで浮き彫りになるのが、ひとりひとりのストライキにかける思いの違いである。マルコムは借金に苦しみ、飼犬に餌をやれずに殺してしまうほど思い詰め、このストライキを続けることに疑義を抱くようになってしまった(80-86)。スパッドはといえば、ハートの甘言にのりストライキは違法だと炭鉱労働者組合を裁判に訴えることになる(87-90, 97-98)。ストライキを継続したすべての労働者がそれぞれ葛藤を抱えながらこの苦難の時期を過ごし、ついにストライキは敗北に終わり職場復帰ということになるのだが、彼らが戻る炭鉱はもう昔と同じ場所ではない。「あいつらみんなスト破りだ」(125)と陰で最後までストに参加していた労働者が言い捨てるように、第三幕における落盤事故を通して克明に描かれたのは、事故の遠因となる労働者間の断絶である。事故で命を落とすファニーが最後につぶやくように、国が何十億ポンドも費やして戦ったこのストライキで多くの人命が失われ、多くの労働者が職を失い、地域社会は荒廃するなど多くの犠牲と損失があったが、それと同時に失われたのは、脈々と世代を越えて培われてきた炭鉱労働者としての矜持であり、炭鉱労働の安全を支えてきた労働者相互の信頼関係なのである。

3 <映画>「連帯よ 永遠なれ！」・・・『なおも内なる敵 (Still the Enemy Within)』(2014)、『パレードへようこそ！ (Pride)』(2014)

本節では、炭鉱ストライキ30年を迎える年に公開された二つの映画、『なおも内なる敵 (Still the Enemy Within)』(2014)と『パレードへようこそ！ (Pride)』(2014)を考察してみたい。

まず『なおも内なる敵』であるが、これは当時

の写真やニュース映像を用いながら炭鉱ストライキの道のりを振り返るドキュメンタリー映画である。その特色は、この種の記録映画では常套的かもしれないが、実際にストライキやその支援活動に参加した人々へのインタビューに導かれながらこの歴史的物語が進行していく点である。彼らが語る内容は、当事者の個人的証言であるからこそその実感を伴ったエピソードが満載であり、それを時に再現映像もまじえながら伝えており大変興味深い。たとえば、ノーマン・ストライク (Norman Strike) という人物 (面白いことに本名である) が早朝の「監視線 (picket line)」に一人で立つことになり、やって来た巨大なローリーをたった一人で次々とUターンさせた様子や、警察の厳しい取り締まりをかいくぐるためにジョギング姿で突破する者の話などが再現映像で描かれており、マスメディアが取り上げて来なかった一人一人のストライキ物語が効果的に伝えられている。

炭鉱ストライキは当然のことながら労働者側の敗北という結末を迎えるのであり、その歴史的事実を覆すことはできない。がしかし、この映画を失望や絶望ではなく希望の物語に変えているのは、以下の二つの描写があるためである。まず一つ目は、次の『パレードへようこそ！』(2014)にもつながる視点からであるが、このストライキ闘争の間に多種多様な団体が炭鉱労働者に支援の手を差し伸べたという歴史的事実の指摘である。映画の中に登場するのは、当時の「学生支援団体 (Student Support Group)」の代表ガリー・マクファーレン (Gary Macfarlane)、『パレードへようこそ！』で大々的に取り上げられた「男性同性愛者および女性同性愛者による炭鉱労働者支援団体 (Lesbians and Gays Support the Miners, LGSM)」のマイク・ジャクソン (Mike Jackson)、そして「黒人団結団体 (Black Solidarity Group)」で、その他に音楽業界から支援を表明した The Clash, Bruce Springsteen, The Red Skins, The Mekons, The Specials などのバンドが言及されている。確かに賛否両論があった争議であったが、このように炭鉱労働者の回りには地域コミュニティを越えて幅広い支援の輪が存在していたという事実そのものが人々を勇気づける要素となっている。

その上、映画の最終盤において、さらなる「連帯 (solidarity)」を示す場面が挿入されている。

しばしば炭鉱ストライキを主題としたテレビ番組等では、この敗北に終わった出来事を締めくくりにあたり、ストライキ終結後に初めて職場復帰する際の労働者たちの姿を映している。すなわち、それぞれの炭鉱の旗 (banner) を掲げ、ブラスバンドの音楽に合わせて負けはしたが誇りを持って炭鉱に戻る労働者の姿である¹²。しかしながらこの映画では、確かに最後は閉鎖されて昔日の面影が失われたフリックリー炭鉱 (Frickley Colliery) の感傷的な場面で終わるわけだが、その直前に描かれるのは、これまでインタビューに登場した面々が様々なスローガンのもとに集う人々とともにデモ行進をする様子である。大学授業料値上げ反対、郵便局 (Royal Post) 民営化反対、「ゼロ時間契約 (zero-hours contract)」¹³ 反対、教員組合や消防士や NHS 労働者の待遇改善に関するデモなど、現在もなお政権への反対の意を示すために通りに出る人々と炭鉱ストライキ参加者が肩を並べて歩む様子は大変明るく希望に満ちた光景として描かれている。確かに炭鉱ストライキは敗北に終わった物語であるが、その意志は確実に次の世代へと受け継がれていることを示す場面となっており、「異議申し立て」の文化の継続と時代を越えた「団結」を示すものとなっているのだ。

次に『パレードへようこそ!』である。閉鎖される炭鉱のブラスバンドの活躍を描いた『ブラス! (Brassed Off)』(1996) や、ストライキ中の炭鉱町でバレエダンサーを目指す少年を描いた『リトル・ダンサー (Billy Elliot)』(2000) と同様に、この映画もまた「炭鉱ストライキ」にまつわる娯楽作品の一つなのだが、興味深いのはその切り口である。先に挙げた LGSM、すなわち「男性同性愛者および女性同性愛者による炭鉱労働者支援団体」という組織が、ストライキを戦っていた南ウェールズにあるデュライス・ヴァレー (Dulais Valley) という炭鉱町を支援したという史実に基

づいた物語なのである (Kelliher)¹⁴。「炭鉱」は男らしさを誇りとする労働者たちの職場とされ、映画の中にあるように「オカマ (poof)」を馬鹿にしていじめていた炭鉱労働者も多いと推察される。がしかし、マーク・アシュトン (Mark Ashton, 1960-1987) が率いるゲイとレズビアン組織は、実際に街角などでストライキ支援の資金を募り、デュライス・ヴァレーに赴いて地域の人々と交流を持ったのだ。映画の中で、炭鉱町代表としてダイ・ドノバン (Dai Donovan) が募金を寄せてくれた同性愛者たちに対して感謝のスピーチを行う場面がある¹⁵。「自分よりもはるかに巨大で強大な敵と闘っているとき、どこかで見知らぬ友が応援してくれていると知るのは最高の気分だ。」大きな敵と戦う時に支えてくれる友として、この両者は結びつく。実際に彼らは、警察やタブロイド紙『ザ・サン』や『デイリー・メール』などの右派的な新聞そしてサッチャー政権という共通の敵と戦っていたマイノリティ集団であり、映画の最終場面で1985年のゲイ・プライド行進にデュライス・ヴァレーの面々が駆けつける様子で表されているように、両者の関係は相互的な支援に基づく「連帯」として結実したのである。

なお、この作品は歴史的事実を背景とした「炭鉱ストライキ」映画であると同時に、すぐれた「クイア (queer)」映画でもあるため、この作品の「同性愛」に関わる要素について付言しておきたい。この映画の主人公は一見すると LGSM 代表のマイク・アシュトンと思われるかもしれないが、実は物語で重要な位置を占めるのは実家のあるブロムリー (Bromley) という地名であだ名されるジョーである。この映画はジョーが恐る恐る「ゲイ・プライド」行進に顔を出すところから始まり、様々な立場の人々との交流の中で自分のゲイとしてのアイデンティティを確立していき、最後は胸を張って1985年の「ゲイ・プライド」に

12 たとえば、*Scab* (Yorkshire Television, 1985) や *Faith* (BBC, 2005) といった炭鉱ストライキを扱ったテレビドラマのエンディングを参照。

13 「ゼロ時間契約 (zero-hours contract)」とは、雇用者側が最低労働時間を設定することなく (そのため「ゼロ時間」でもよい) 従業員と結ぶ労働契約であり、所得が非常に不安定となるため英国では社会問題化した。

14 LGSM に関する資料の多くは、マンチェスターにある「民衆史博物館 (People's History Museum)」で保管されている。

15 ダイ・ドノバンは実在の人物であるが、引用のスピーチはフィクションである。彼が実際に「炭鉱とヘンタイ (Pits and Perverts)」と題されたチャリティ・ギグで行ったスピーチについては Tate 216 を参照。国会議員になったジャン・ジェイムズ (Sian James) をはじめとして、ドノバンの他にも実在の人物が多数映画の中に登場しているが、彼らのインタビューから LGSM の歴史を再構成したのが Tim Tate の本である。

参加するというジョーの成長物語であるのだ。また性的アイデンティティの探究はジョーにとどまらない。これも実話に基づいているのだが、デュライス・ヴァレーの組合書記官であるクリフが胸に秘めていた同性愛の秘密や、性的喜びを得ることに対する女性の目覚めなど、性に関わる自分のアイデンティティに「プライド」を持つことが重要なテーマとなっている (Tate 270-271)。また、最後に忘れてならないのは「エイズ」の問題である。実際にマイク・アシュトン自身がエイズで亡くなっており、八十年代に猛威を振るうエイズの影がこの映画の随所に現れている。このように同性愛をめぐる状況が大変厳しい中で、「同性愛者」と「炭鉱労働者」の間に驚くべき結びつきが存在していたことを歴史の中から掘り出し、新たな時代の「連帯」の可能性を示したことがこの映画の大きな収穫と言えよう。

4 <ダンス>炭鉱労働者の道徳的勝利とコミュニティの「絆」・・・ガリー・クラーク・カンパニー (Gary Clarke Company) 『石炭 (Coal)』(2014)

炭鉱業とダンスほど相容れない組み合わせはないように思われるかもしれないが、実際はそのようなことはなく、むしろ「身体性」を軸としたパフォーマンスにおいては適切な主題として取り上げられることがある。たとえば、歴史的に炭鉱業とは縁が深いウェールズのカンパニーであるヴォルケーノ・シアター (Volcano Theatre) による『黒いモノ (Black Stuff)』(初演 2015 年)。「炭鉱業によって形作られた生活と想像力に関するプロムナード・ショー」と銘打たれ、カーディフのウェールズ・ミレニアム・センター近くの廃ビルを舞台とし、案内されるがまま朽ち果てた建物の中をめぐりながら炭鉱労働者の生活と労働をモチーフとしたパフォーマンスを見るという形式の公演であった¹⁶。ウェールズのアイデンティティを探すべく投影された写真、床に敷きつめられた石炭の上をヘッドランプをつけて這うダンサー、ロウソクやハンマーやドラム缶やグライNDERやレールなどの小道具を使ったノイズとスペクタクル、暗

闇の中で語られる超自然的な物語などが、統括するプロットやコンセプトがないまま繰り広げられていた。そのため、ある劇評では断片の寄せ集めに過ぎず「まったくわけのわからない物語」と一刀両断に切り捨てていた (Waugh)。確かに成功しているとはいえなかったが、炭鉱労働に関わる「身体」と「モノ」、そしてわれわれの思いも及ばぬ黒い闇の中で営まれてきた炭鉱業という「謎」を審美的に捉えようとする試みではあったのだ。

それとはまったく異なり、炭鉱に関わる「物語 (narrative)」をダンスの中で効果的に伝えたのが、ガリー・クラーク・カンパニー (Gary Clarke Company) による『石炭 (Coal)』(初演 2014 年)である¹⁷。このカンパニーの主宰であるガリー・クラークは、南ヨークシャー (South Yorkshire) のグライムソープ (Grimethorpe) 出身である。グライムソープは、1990 年代の炭鉱映画で世界的に有名になった『ブラス! (Brassed Off)』(1996) のモデルとなった村である。クラーク自身も炭鉱の労働者階級の環境の中で生まれ育ったためその影響を強く受けており、炭鉱ストライキ 30 周年を迎えて、われわれの社会の根幹を成す炭鉱業の記憶を保ち、その中心にあったコミュニティとそこで生きた人々を賞賛することを目的にこのダンスを作ったのである (“Coal: Programme Notes”)

『石炭』で語られる物語は大きく分けて二つあり、ひとつは炭鉱労働者の日々の生活と労働の描写であり、公演後半のクライマックスになるのが炭鉱労働者に襲いかかるサッチャー首相と「炭鉱ストライキ」の戦いである。

炭鉱労働者の生活は、朝の鳥のさえずりの中で妻が食卓の準備をする様子から始まる。五人のブラスバンドの演奏にのせ、妻が白いシーツにくるまる夫を叩き起こして着替えをさせるといったさやかな日常が二人のユーモアあふれる所作とダンスで描かれる。きわめて言葉の多いダンス公演でもあり、しゃべりまくりながら夫を送り出す妻は、労働者階級の家庭を守る典型的なたくましい主婦として、一日の始まりを告げていた。

それから夫は自転車に乗り、仲間四人とともに仕事場に向かう。五人の労働者の間に存在する「仲

¹⁶ 2016 年 5 月 28 日に観劇。引用は公演の宣伝リーフレットから。

¹⁷ 2016 年 5 月 24 日に Nottingham Playhouse にて観劇。このダンスの原型となるものは 2006 年に作られたが、本公演のために 7 人のダンサーと 4 名の「コミュニティ・キャスト」による約 80 分間のダンス・シアターとして制作された。

間意識 (camaraderie)』は、五人のアンサンブルのダンスから自然と立ち上がってくる。彼らの地下での労働の情景もダンスによって描かれるのだが、それにアクセントをつけるのが、地下へと下るケージの動作音や労働時間を知らせるベルの響き渡る音などの炭鉱独特の機械音である。また、彼らの労働を表すダンスは、スコップや木のパレット (木杵) など炭鉱での様々な作業に使用される用具とともに繰り返される。その踊りの特徴は、地下の狭苦しい空間で展開される「低くうねるダンス」とでも言えるだろうか。地下での仕事にふさわしく基本的に重低音が響き渡るサウンドに合わせて、男たちは「かがむ」、「はう」、「のたうつ」、「くねる」などの動作を繰り返し、時にお互いを支え合いながら重労働に従事する肉体¹⁸を表していた。そして、くたくたに疲れ果てた五人は舞台上に倒れ込み、並んで横たわる。荒い息づかいが聞こえる中、男たちの汗が光る五つのたくましい裸の背中で肩甲骨だけがうごめく。炭鉱労働の苛酷さと同時に、骨身を削りながら一生懸命に仕事に取り組む労働者の崇高な姿として結実するこのシーンは大変印象的で、本公演の美的なクライマックスと言えるものとなった。

そして、帰宅後に汚れ切った男たちのからだを洗うのは彼らの妻たちである。ここでは、はじめに「妻」として出演していたカンパニーに属するダンサーの他に、「コミュニティ・キャスト (community cast)」と呼ばれる地元 (ノッティンガム) の女性4名が出演し、バケツを片手に男たちの背中を洗うだけでなく、その後のダンスや歌にも加わることによって会場を盛り上げた¹⁹。炭鉱労働者の日常生活を時に誇張をまじえたユーモラスな動作で描くとともに、炭鉱での共同作業を思わせるアンサンブルと強度に満ちたダンスで苛烈な地下労働を表すことによって、『石炭』はまさに古き良き炭鉱労働者の生活様式に対する大いに敬意を込めた賛歌となった。

だが、当然これだけで物語が終わるわけではない。その後、最大の敵であるサッチャー首相が現

れ、炭鉱コミュニティが迎える最大の試練となる炭鉱閉鎖の波が訪れる。興味深いのは、サッチャー首相が登場すると、誰かれとなく観客席から盛大なブーイングが起きたことだ。舞台上部では1984-85年の炭鉱ストライキの映像が流され、サッチャー首相の演説が聞こえてきて、当時を知る人も知らない人もあの大事件を思い出しながら舞台を見つめることになる。ステージでは炭鉱労働者とその妻たちが集い、赤旗を振りながらストライキに入る。そして長く続くストライキの最中にクリスマスを迎え、困窮状態にありながらも皆でパーティーを開催して盛り上がりとうとする。しばしばパーティーで行われる「富くじ (raffle)」をこのステージ上でも実際に行い、キャストが観客席に下りてお菓子を観客たちに配ったり、富くじの「当たり」としてリーク葱を賞品にあげたりしていた。このような舞台と観客席をへだてる「壁」を越えることによって、観客もまたストライキの参加者側に立ち、舞台上の炭鉱労働者たちとの一体感は高まることになった。

しかしながら、このストライキは炭鉱労働者たちの敗北に終わる戦いであるため、この物語にどうやって幕を下ろすのかというのは難問であるが、この作品では炭鉱労働者たちにいわば「道徳的勝利」を与えることによって決着をつけていた。再びサッチャー首相が演説をBGMにして登場する時、彼女は太いロープを持って現れ、それを舞台上に置く。そのロープは、スト破りやストに対する妨害を防ぐために設ける「監視線 (picket line)」なのである。長期化したストライキで疲弊した炭鉱労働者の一人が、ついにその線を越えてサッチャー首相のもとにうづくまる。「スト破り (scab) !」とののしられ、つばをかけられる彼は、その姿のまま動けない。他の炭鉱労働者たちもふらふらになりながら線に向かって歩み出してしまうが、妻たちに止められる。ストライキの物語のクライマックスとなるのは、冒頭から登場していた炭鉱労働者夫婦が見せる最後の圧巻のダンスによって描かれる葛藤である。越えるべきかどうか

18 また、炭鉱労働の描写では不可避である健康被害の様子について、このダンスではヴェートーベンの『運命』をBGMに男たちの黒い風船を割ることで炭塵による肺の病を表現していた。

19 「コミュニティ・キャスト」となる女性4名の募集は、作品に「真正さ (authenticity)」を与えるために不可欠としてどの会場でも行われており、プラスバンドのメンバーも会場の地元から (可能であれば炭鉱プラスバンドから) 募っていた ("Coal: Programme Notes")。

苦悩しながらピケット・ラインに近づく夫をぎりぎりのところで引き離す妻の様子が、二人の荒い息づかいが聞こえるほど抑えられたサウンドの中、まさにくずほぐれつ体を激しく入れ替えながら練り広げられるデュエットのダンスとして呈示された。結局、夫は一線を越えることなく、最後まで体制に屈せずガッツポーズをするところでダンスは終幕を迎える。

ストライキ終了後の職場復帰という「敗北」を描くことなく最後まで抵抗を示すことによって、このダンスは時の政権に対する「道徳的勝利」を表した。ただしそれは歴史的眞実ではないし、戯画化されて演じられたサッチャー首相の姿のように、政治的側面が単純化されることにより、たとえばバス・スティールのような対立の「両側」の詳細な政治分析には至っていない (Smith)。しかし、この公演の中心的な目的は、この炭鉱をめぐる「物語」をダンスで語ることによって、新たに人々と「団結」の絆を結ぶ可能性を探ることだと解することもできよう。前述したように、舞台上の「労働者」と観客席にいるコミュニティの人々の間を橋渡しする様々な方法²⁰を駆使し、このダンスは劇場内に一種の一体感を生み出した。地域から集まる観客ひとりひとりが、地域の歴史を変えた重要な物語を目の当たりにし、その物語の主役たちとの「連帯感」を味わえることがこの作品の強い魅力となっているのだろう²¹。

5 おわりに・・・新しい時代の「団結 (solidarity)」を求めて

1984年から三十年以上が経った現在でも、英国では「炭鉱ストライキ」を振り返り、演劇、映画、ダンスなど様々な文化形式を用いてこの歴史的出来事を語り直し続けている。英国社会の歴史において重大な転機であったこのストライキにより、われわれが失ったものは何かをもう一度探し出す作業であったり、それがどのように失われた

のか、そしてその喪失が社会に何をもたらしたのかを問い直す作業ともなっているのだろう。さらには、この戦いにおいて「団結」という概念が重要な位置を占めていたのだが、新たな時代において弱い立場の人々がどのような“solidarity”を形成することができるかを探る試みとしても捉え直されている。「置き去りにされた (left behind)」人々 (水島 161ff) の動向が社会を動かす鍵となる今だからこそ、「炭鉱ストライキ」が生む様々な文化表象を注視していきたいと思う。

Works cited

- Black Stuff*. Perf. Volcano Theatre. Wales Millennium Centre, Cardiff. 28 May 2016.
- Coal*. Perf. Gary Clarke Company. Nottingham Playhouse. 24 May 2016.
- “*Coal*: Programme Notes.” Gary Clarke Company. Nottingham Playhouse. 24 May 2016.
- Godber, John. “Educational Notes on *Shafted!*” <<http://thejohngodbercompany.co.uk/wp-content/uploads/2017/03/educational-notes-on-shafted.pdf>>
- . *Plays 2 (Teachers, Happy Jack, September in the Rain, Salt of the Earth)*. London: Methuen, 2001.
- Harrison, Tony. *V*. 1984. Newcastle upon Tyne: Bloodaxe Books, 2008.
- Holden, Triona. *Queen Coal: Women of the Miners' Strike*. Stroud: Sutton, 2005.
- Hoyles, Martin, and Susan Hemmings, eds. *More Valuable Than Gold: A Collection of Writings on the Miners' Strike of 1984-1985 by Striking Miners' Children*. London: M. Hoyles, 1985. [マーティン・ホイールズ/スーザン・ヘミングス編 (山崎勇治・田中美保子 訳) 『父さんの贈りもの イギリスの炭鉱の子どもたちが書いたストライキの本』 (レターボックス社、1987年)]
- Jones, Owen. *Chavs: The Demonization of the Working Class*. London: Verso, 2016. [オーウェン・ジョーンズ 『チャヴ 弱者を敵視する社会』 (海と月社、2017年)]
- Kelliher, Diarmaid. “Solidarity and Sexuality: Lesbians

²⁰ 観客が入場する際に、ストライキの際に使用された「失業手当ではなく石炭だ (Coal not Dole)」という円形の黄色いステッカーによく似た『石炭 (Coal)』ツアー用のステッカーを配られ、まさにストライキ側に加わる気持ちで劇場に入るという工夫がなされていた。

²¹ 初演以来『石炭』は好評を得て2年半のツアーを行った。そして2019年3月からは、舞台を1994年に移して炭鉱閉山後のコミュニティの様子を当時のレイブ・カルチャーとともに描く続編『荒地 (Wasteland)』の公演が控えており、その人気のほどが伺える。

- and Gays Support the Miners 1984–5.” *History Workshop Journal* 77. 1 (2014): 240-262.
- Loach, Ken, director. “Which Side Are You On?” *The Spirit of ’45: A Film Directed by Ken Loach*. DVD. Dogwoof Ltd., 2013.
- Milling, Jane. *Modern British Playwriting: The 1980s: Voices, Documents, New Interpretations*. London: Methuen Drama, 2012.
- Milne, Seumas. *The Enemy Within: The Secret War Against the Miners*. 1994. London: Verso, 2014.
- Oldham, Craig, ed. *In Loving Memory of Work: A Visual Record of the UK Miners' Strike 1984-1985*. Manchester: Unified Theory of Everything, 2016.
- Peacock, D. Keith. *Thatcher's Theatre: British Theatre and Drama in the Eighties*. Westport, Conn; London: Greenwood, 1999.
- Pople, Simon, and Ian Macdonald, eds. *Digging the Seam: Popular Cultures of the 1984/5 Miners' Strike*. Newcastle upon Tyne: Cambridge Scholars Pub, 2012.
- Pride*. Dir. Matthew Warchus. Perf. Bill Nighy, Imelda Staunton, Dominic West, Paddy Considine, and George MacKay. Pathé, BBC Films, et al. 2014. [『パレードへようこそ!』(KADOKAWA, 2014年)]
- Saunders, Graham. *British Theatre Companies: 1980-1994: Joint Stock Theatre, Gay Sweatshop, Théâtre De Complicité, Forced Entertainment, Women's Theatre Group, and Talawa*. London: Bloomsbury Methuen Drama, 2015.
- Shafted!* By John Godber. Perf. John Godber and Jane Thornton. Marylebone Theatre, Regent's University London. 7 April 2016.
- Shaw, Katy. *Mining the Meaning: Cultural Representations of the 1984-5 UK Miners' Strike*. Newcastle upon Tyne: Cambridge Scholars Pub, 2012.
- Smith, Mark. Rev. of *Coal*, perf. by Gary Clarke Company. *British Theatre Guide* 5 March 2016. <<http://www.britishtheatreinfo.com/reviews/coal-cast-doncaster-12635>>
- Steel, Beth. *Wonderland*. London: Faber & Faber, 2014.
- Still the Enemy Within*. Dir. Owen Gower. Bad Bonobo. 2014.
- Tate, Tim, with LGSM. *Pride: The Unlikely Story of the Unsung Heroes of the Miners' Strike*. London: John Blake Publishing, Ltd., 2017.
- Waugh, Rosemary. “*Black Stuff*” review at Wales Millennium Centre — ‘promenade show fails to make sense.’” Rev. of *Black Stuff*, perf. by Volcano Theatre. *The Stage* 20 May 2016.
- Williams, Granville. *Shafted: The Media, the Miners' Strike & the Aftermath*. London: Campaign for Press and Broadcasting Freedom, 2009.
- 長谷川貴彦『イギリス現代史』(岩波書店, 2017年)
- 早川征一郎『イギリスの炭鉱争議(1984～85年)』(御茶の水書房, 2010年)
- 水島次郎『ポピュリズムとは何か 民主主義の敵か, 改革の希望か』(中央公論新社, 2015年)
- 山崎勇治『石炭で栄え滅んだ大英帝国 産業革命からサッチャー改革まで』(ミネルヴァ書房, 2008年)